

4791

168
488

軽智
清純

お笑草

美空ひばり

美空ひばり
美空ひばり



091605-000-8

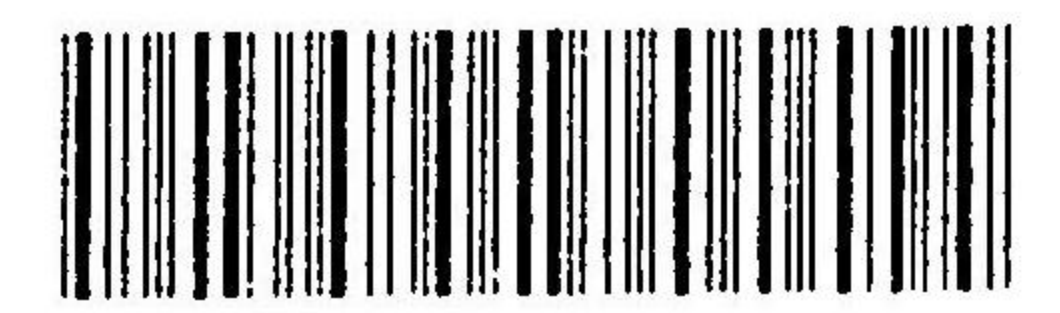
特63-455

お笑草

哄笑子/編

M33

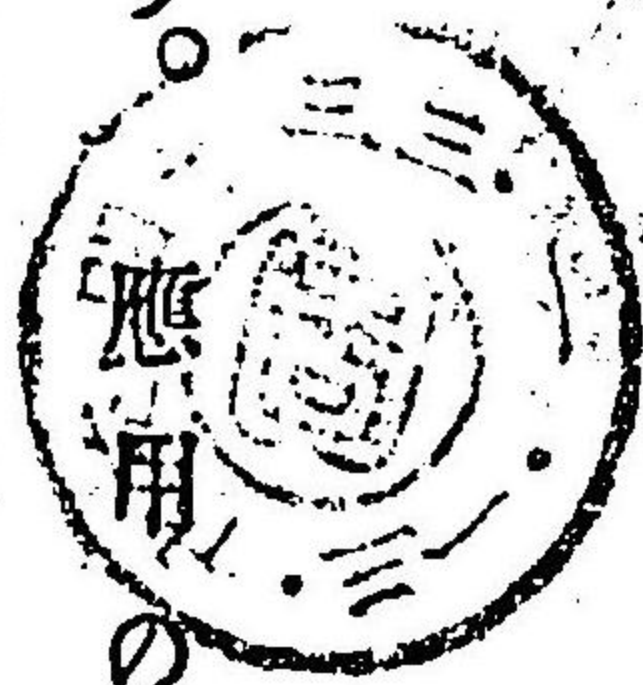
DBO-0051



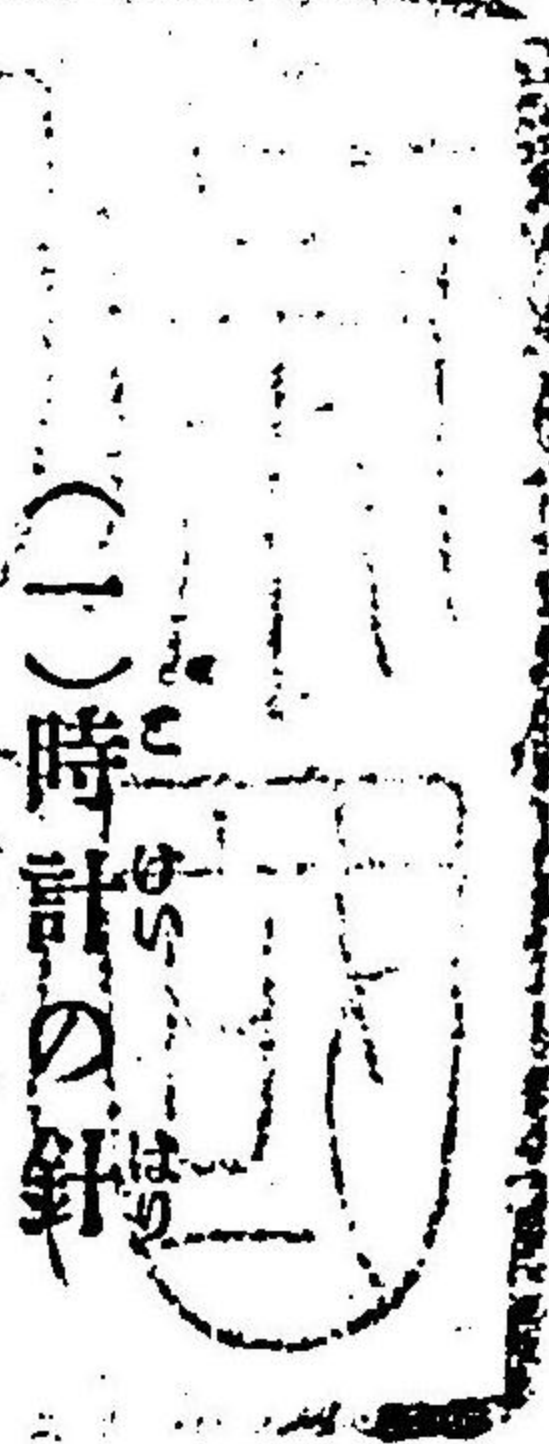
はしがき

頓響滑稽は機變に處する一の術なり。國の匿き事言ふを待たず。和漢古來斯る事に關する多少の著書有りしかども人の之に重きを置かざりしため其勢微微として振はず、之を歐米の讀書社會のよく此類の書冊其價も亦少なからざるを歡迎するに客あらざるに比して其差霄壤も嘗あらざるあり。

此書いささか今日此類の著の乏しきに應じて、或ひは異日また彼土の如く此類の大作を出ださしむべき一の彈機たるを得んかとの希望より編



頓智 お笑草



(一) 時計の針

女房にようばうふくれて、「今いま時じ分ぶんそんなに酔よッて御おん歸かへりなすッてさ
 何なにうしたンです、何なに時じだと御おん思おもひあさる、ばかばかしい、
 何なに時じですよ。」待まちて待まちて。うム解わからあ、はてあ何なに時じか
 知しら。「大だい層そう酔よッたもンですね、時じ計けいの針はりは見みえません
 か。「何なに見みえる。「見みえてどうして解わからあインです。「だ
 ッて針はりがぐるぐる廻まりつづけだもの。」

(二) 安堵

美 妙 修 補
 咲 子 編

纂せられしもの、社交の煩繁煩擾を加ふるに随ひ、頓智滑稽談の如き清涼劑は期せずして必ず要せらるるものなればあり。

著 者

「御良人が御亡かりで照御さみしうございませう」と親切に寡婦にたづねると、「有りがたうございます。ですが最う毎晩安心でございますよ。」「へエ、何が御安心で。」「良人が毎晩泊って居るところが解って居りますから。」「

(三) 判任官

庄客であつたのが傳手によつて株を手に入れ、田舎の三等郵便局長になつて嬉しくてならない。直に標札拵らへ黒くろぐると、「〇〇村郵便局長判任官何某。」それで御まけに名刺へも。

(四) 索を截る

風に帽子を井戸へ吹き落とされ、友だちに頼んでしツか

り索の一方を持つてもらつて、やがて其索に縋つて下りた。「めめた、取れたぞ。おい、取れたからもう可い、引き揚げてくれ。おい何うしたんだ、引き揚げてくれと云ふのに。」ところが上では困らせてやらうとの悪戯から一向に引き揚げない。下では段段おれ出して、おいがいつしかやいに變はつて、「やい聞こえあいか是はど云ふのに、どうしたんだ。畜生、わる悪戯すると目に合はせるぞ」といよいよ焦燥にちれて、「この索截つて了ふぞ。」

(五) 治ツてから

桶峽の撃ち入りに今川も終に亡び、木下藤吉郎の手にも七八人の捕虜も有つた。斬らうとするとその中の一人、「二

三日御待ください。「未練を云ふか。」「未練は申しませ
ん。唯わたくし昨今身體がわるうございますから——治
つてから。「馬鹿、どうせ死ぬんぢやないか」と叱られて、
始めて氣が注いたらしく、「はい、さうでしたッけね。」
流石の藤吉失笑して、「とばけ方が氣に入ッた。赦して
やれ。」

(六) 鮮魚

「先生、鮮魚には病ひ氣といふものがございませぬので
しやうね」と奥さんが囁みつけの醫者にたづねると、先
生こたへて、「ございませぬとも。どれ一疋でも診察たの
みに來ませぬもの。」

(七) 市右衛門

芝居を觀たことのあい百姓に向かつて、「五右衛門の釜入
りは凄いもんだね、見たばかりでも。御前見たこと有る
か。」「似やうなのは見た。」「似たやうかとはどんかこッた。」
「市右衛門(豆の名)の炮烙熬りさ。」

(八) 御苦勞さま

廣東あたりで或る時英人の舞踏會が有つた。つくづく觀
て居て一人の支那人、「御苦勞さま、御つかれなさいまし
よ。あせ下男や下女に爲せあさらないのです。」

(九)

軍曹さていよいよ敵にびたりと出遇ッたら貴様どうする

かゝ、無論短距離なのだ。」

兵士はい、その時はただちに敵に向かつて進みますな。」

「進んでそれから。」

「敵兵の脚を截ります。」

「脚を截るとは何うしたのだ、なせその首を断らんのだ。」

「いや、もう首の無くあつたのを選りますので。」

(一〇)双仔

不思議な事ばかり言ひたがる男が有つて、ある處で双仔の咄しが出たら濟ました貌で、「わたくしの國にも瓜二つといふ双仔が有りましたね、御たがひに金を貸したり借りたりすると、毎でも終局には何方が借りたか貸したか

解らなくあつて了ひましたよ。」

(一一)自分のこと

落ちつき拂つた人に短氣な男がぐわんぐわんと喧嘩を吹ッかける。ところが一方の先生一向その喧嘩に乗らぬのでいよいよ焦燥こみ、「馬鹿め、大呆郎、世界第一の阿房」とまで行き出した。すると一方は猶落ち着いて、「あはは、自分のことを云つて居る。」

(一二)古人の名

玄きりと片端から現時の文學者を貶し飛ばす癖の或る男が有つて、「今の文學一つとして見るに足るべきもの無し」と高言するのを、つひに慄へかねて一人の文學者が斯う

書いてやった、もし古人の名を御おぼえなさらば又古人を引きずり仆しなさるべく候。

(一三)五錢の謝儀

水に溺れさうか人を救けてやると、大に喜んだは可いが、謝儀として五錢の白銅一つを出したので、救けた人も呆れかへって、「これが貴下の命の値ですか。」「は。」「五錢の命?」「まづ然様で。」「ようござる。此五錢御かへし申して、その代はり舊のとほり投げ込みましよ貴下を。やすいから水も悦びませよ。」

結局は相當の謝儀となつた。

(一四)眼で困る

「どうも眼で一年中困つて居りますよ、流行眼をわづらはかければ霽んだり何かして——ほんとに困りますよ」と言ふと、皮肉屋が、「困るいかに。」「これを無かつたら猶。」

(一五)牛づれ

ペロナの王が大詩人ダンテに向かひ、「どうしたもんですかな、先生ほどの大家を全國一人として褒めるものも無く、却つてつまらぬ輩が時を得て、おあじく先生をして後世の公明ある評を俟たせるとは。」「ダンテ笑つて、「すこしも管ひません。」「御かまひは有りますまいが残念です。彼等ばかり一連とあつて、先生は除外物ですもの。」「そ

の筈です。「とは又。」「牛は牛づれでさ。」

(一六) 烟草すき

「あなたは煙草を好きか方は有りますまいね、大抵飲
みつづけで室の中が此とほり曇ッてしまひますよ。」「曇
ッて烟管の雨が降れば猶うれしい。」「いい加減にあさ
毒ですわ。」「是ばかりは廢められないね。」「そりや氣一
つです。些し長く我慢して喫ますに居ると、さらひに爲
りますとさ。」「だめだ、乃公も一時は久しく喫ますに居
た。」「謊言を。」「ほんとだ。而も十五年間喫ますに居た
が駄目だ。」「ほんとですか。でも貴下の御齡で。」「それ
は生まれてから十五までさ。」

(一七) 念入り

主婦 鍋や、時間の何分といふのを見るのはもう覺えたる
ね。」鍋おぼえました。「どこから何處までが三分だい。」
「一、二、三、この三框。」「それぢや最う可い。すると
半熟に玉子を茹でるのだがね、たぎった御湯に三分だけ
入れて置くのだよ。」「かしてまりました。三分だけ入れ
て夫から上げるので御座いますね。」「さうだよ、手早く
よく時計を見て、何でも三分になつたら直とね。」「かし
こまりました、よく時計を見まして。ですが奥さま」と俄
かに心づいたやうに言ッて、「ついでに伺ッておきますが、
もしその時はいかが致しませう。」「もし、どの時？」

「もし時計が止まりました時。」

(一八)四と八

片眼の丁稚「ほんとに此處の家はど人づかひの悪い處は有りやしな。何しろ四時間しか寝かさあいなんだもの。」
両眼共に有る皮肉の朋輩「うそ言へ。八時間ぢやあいか。勿體ないこと云ふあ。」

「それでも一時に寝かせて五時に起す、それ四時間だる。」

「そりや御前だけの咄した。乃公は眼が二つ有る、御前が片眼で四時間だから、乃公は二つで八時間だ。」

(一九)專賣の筆

「御召しなすって御ためし下さいまし、此度專賣特許になりました筆でございます。」
「書きよくでも有るのかね。」

「書きよいのは申すまでもなく、保ちが永うございます。まづ並の筆の倍、並のを二本つかふ内には是は一本で充分です。それで値段は並のとかなじで。」
「それは調法だから。斯うと是れ一本が並の二本ぶり、それで値段はおかじと、まて見ると此筆半分で並のが一本ぶりにあるところ、半分とすれば半値になる、こりや安い」とにっこり笑って、「買ふから、筆屋、半分にして賣ってくれ。」

(二〇)不廉い隣寸

新橋ステーションには然はど飛びはかれた田舎客も殆ど

無いが、上野には随分有る。場内の烟草屋で隣寸を買ふとで、「これいくら。何、五厘？もし五厘だとえ？幾函でね。」「それ一函で。」「一函でッ、やッ、こんな小пейものを不廉いや、そりや。二厘がに負けなさる。」「負かりません。」「可いやあ負けたッて。始終まうけてる癖に――私は初めての客ぢやあいか。」「いけません。」「景物と思ッて。」「何も買はあい方に景物は上られませんか。」「江戸の人はわかりが悪いあ。二厘がに買から五厘から差し引き三厘を景物にくれるンだアあ。ぢれッてエ。」「何しろいけませんよ。」「あれ、もう汽車が出らアあ。乗りそくあふと大變だ。」「どうでも爲さる。」「ぢれッてエな、それ

ぢや言ひ値に買ふとしやう。五厘だッけな。」「さよです」すると恭しく二厘五毛出して、「半分分けてくんな。」

(二二)二人前

米國通をもッて誇る甲氏が此頃米國には始めての乙氏と同伴じてポストンに至り、はなはだ風儀のよくない家とも心つかず、その店がまへの好さに惹かれて只有る飲食店へと入ッた。

店には黒板に金文字で、「菓子果實および咖啡御随意飲食附一席五十錢」と貼り出してある。

「やすいあ、御随意飲食つきと云ふから管はずに食ふべし、また飲むべしだ」と二人とも壯にきこしめして、偕

その代はと聞くと「二弗」といはれた。
「間ちがへちやいかんせ、二人だせ、四人ぢやないよ。五十錢づつなら一弗だろ。」

「玄かし四弗いたなく理由が有ります。」

「貼り出しに五十錢とあるぢやないか。」

「さうです。但し一席と有りましたよ。一席を占められるに對して五十錢づつ請求するのです。あなた方のその革靴は何と何うです。」

玄まツた、二人ともおの何心なく革靴を身の傍の椅子に載せて置いた。

「革靴の分も取るのか、飲み食ひしさいでも。ひさいか。」

「飲食は御随意と貼り出してありますよ。」

ぐツと凹まされる。他の客ども一度にどツと失笑した。

甲氏米國通と自慢するほどの身が同伴の乙氏に對しても面目なく、いまいましく、残念でたまらさい。が、一計をおもひ付いて、

「主人、己むを得んからそれでは四席分を拂ふ。」

「ありがたうございます。たしかに四席分二弗。」にこにこもので受け取つた。

やがて甲氏は革靴を叩いて、「ああ汝わが友たる革靴君、君たちの席料をも拂ツた、もう願慮するところも無い。君も腹は有る、もつて食物を納むべしだ。君も口は有る、

もって食物を容るべしだ。ああ飲食は随意で一席が五十
 錢、それ此ビスケットも、此デセールも、此パイも此林
 檜も、さアさア充分食ッたり容れたり……」
 卓上さながら風にさらはれたやうに、目ぼしい物は容
 赦なく革靴の中へと食はれてしまへば、満座みあわツわ
 ツと笑ひ出す。主人あきれかへって口あんぐり、眼まじ
 まじ。

(二三) 帽子と頭

權助がそのちびちびと貯めた錢で帽子を買ひ、大事にし
 て居たところ、戶外へ出て雨に遇ったので、ビツくり敗
 亡して帽子を取って羽織の袖の中へ裹み、づぶぬれにな

って主人方へ立ち歸ると、言ふまでもなく主人は見とが
 めて、

「折角帽子の有るのにあせ濡れて來た。毒ぢやないか。」
 「いいえ、この帽子は私等が物、大事でさ。着物は旦那
 さまの物、かまひましねエ。」

「正直な奴だ。それにしろ其濡れた頭は貴様のおやな
 いか。」

「うんにや、さうでありましねエ。叩かれどほしの低り
 どほし、自分で自分の自由にあらねエ、厄作を頭でがさ、
 自分の物たア思はれましねエ。」

(二三) 死んだら熄せ

客番漢やがて息を引き取らうとして、きつと目を見ひらいて、「死んだらどうぞ火を熄してくださる。」

(二四)見せぬが利口

英の大政治家バルクがある人に向かつて道ふには「僕は一つ戯曲を書いたよ。」「そりや面白い。いづれ世に公にあさいましょ。」「いや」と笑ひながら掉頭をふって、「書いたのは實は阿呆さ、世に公にせぬところは利口さ。」
悪詩拙文を世に見せぬが政治家に聞かせたい。

(二五)上等社會

奉公しまつて村へ歸ると、友だちが取りまいて、「阿麥さんは仕合はせだね、こんなには好い着物まで澤山できて、

うらやましいわ。何でも東京へ行つて奉公するのは阿麥さんの行つたやうな上等社會とか云ふ處に限るのね。全體上等社會へのは何ういふ御邸あの。」
「まづ一口に言ふとね」と阿麥は誇り顔に、「旦那さまが藝者買ひして、それから興さまが役者買ひする御邸なのよ。」

(二六)學者と下男

正直で無骨な下男を英の大學者ニウトンが傭つて居てある時も煖爐の火を熾すやうに吩咐けた。下男そのとはりにして程あく火もさかになると、ニウトン又熱くてあらあい。急いで又下男を呼んで、その火をすこし柔かく

するやうに云ツて、燃えて居ても管は赤いが、熱くてならない」と呟くと、下男は平氣で澄まして、「そんなら貴下が退いたら可いでしょう。」

はたとニウトン手を拍ツて、「嗚呼その智にも及ぶべからず。」

(二七)一反の値

群馬地方でのことで、ある時教師が生徒に神代のはなしをして、「その時 天照皇大神さまは機を織ツてあらせました、御弟の素盞烏尊さまがその中へ汚れた馬の皮を御投げ込みにありましたので」と言ひかけると生徒の一人、「もし先生、その織物は綾ですか、甲斐絹ですか、そ

れで一反いかほどでしたの。嗚不廉うございませしやうね。」

(二八)金の延べ板

一休和尚の駐ツて居るところへ近所の法師ばら五六人が来て、「折り入ツての御ねがひが御座います。此村に牛の長者と云ふ分限が有りまして、人を苦しめる事は何とも思はず、御佛の道をば全く蔑にして後世のいとあみをも考へず、われわれども不惑の事に思ひましているいろに法を説いて聞かせましたが、糠に釘とやらでさッぱり利きませぬ。聖が御飛錫のついで此村に御出であるを幸ひ、もし成るものならば其強慾ものに些しは御佛の道でも知るやうにさせてやツて戴きたいとの微衷から、推し

て伺ひに上がった事でございませう。

とツくりと聞き訖ッて、「よろしい、承知しました。何

の造作も絲瓜も無い。愚僧がまゐれば手の裏かへさず。」

餘りの安受け合ひに、囁みは囁んでもいくらから心許あ

く、「宜しうございませうか、一とほりの強慾ものではござ

いませんから。」

「ようござるとも。その代はり一寸四方ばかりの金の延

べ板を貸していただきたい。はて、どうしやうとも後で

解りますわい。」

それから延べ板を貸してやると、一休それを持ッて長

者の許へ出かけ、金銭の貴いことを喋喋と述べ立て、む

しろその長者の平生の強慾を獎ますやうな事を言ふので、

隨行の法師どもひたと呆れて、頼み甲斐なく思ひはじめ

た。やがて一休は延べ板を取り取して長者に見せ、「い

色ではありませんか、いつ見ても悪くは有りませんね」

と云ふと、長者もほくほくして「さよですな」とにこに

こする。すると一休重ねて、「只かなしい事には是では誰

でも眼が利かあくあり、たツとい物も見えなくあります

さ。」

筆把ッて「如來」の二文字を書いて見せて、「この字あ

またに見えますか。」

長者すこしく興さめ親で、「見えますとも。」

此處ぞと一休例の延べ板でびたりとその字の上を蓋ッ
て、「どうです、まだ見えませうか。」
長者はたと手を拍ッて、「悟りました、今日から佛門に入
りまする。」

(二一九)二時間早

朝は六時に起こしてくれと宿屋の女に頼んで寢て、それ
で起こされたところで時間を見ると四時であつた。「何だ
早過ぎるぢやないか」と些むしやくしや腹でやりつける
と、嫣然と微笑して、「いえ、まだ二時間は御やすみなす
ツても宜しいと申し上げやうと思ひまして。」

(三〇〇)麻匪藥

ある婦人が醫者のところへ来て、「先生、いかにも毎夜よ
く寢られませんかので大きに困り入ります。どうぞゆッく
りと寢られますやうな御藥を。」

「承知しました」と書棚から一冊の書物を取り出して、

「藥は要りません。夜床でこれを御讀みなさい。」

婦人かどろいてその書物を取ッて見ると、目下流行の
某氏の新體詩集。

(三一)牡牛

「天下」の男がある處の牧場を通ると、野飼ひの牛の常、
見張りとして一頭は必らず起きて番をして居るのを見て、
心得がほに、「ふむ、やッぱり牡牛が牝牛の晝寢の番をし

てるわ。」

(三三二) 濟崩

「どうだ權助、一時ばらひと濟崩と何方を御前は好きだ。」

「なしくづしに限りやすね。永らく樂しめるもの。」

「物をもらふにもか。」

「何でもでさ。」

「乃公がもし御前に金をやるとしてもか。」

「猶の事です。何でも氣イ永くするに限りやさ、鷺が魚

捕るだッて然うです。早い咄しが飯だッて氣イ永く食や旨し、朝だッて氣イながく寢こけりや眠くなくなる、そんなもんのでがさ。」

「それぢや御前に一年二十圓づつの給金を十年わたせば二百圓とある、それを然うしないで濟しくづしにして、一年二圓づつにして二百年に拂ッたらどうだな。」

「うん、その方が可いや。」

(三三三) 拙劣

晴れの席で或る義大夫かたりの唱ひ方が平常と變はッて拙ツた。それと仲よしの男が苦り切ッて居ると聞いて、やがて其傍へ行ッて、「君は不服だといふがどうか堪忍してくれ。あんなに拙いこと乃公の是までに無いよ」と云ふと、いよいよ苦り切ッて、「君の是までどころか、日本

(三四)逃亡

「御勘定をいただきに上がりました」と小僧が来て書き出しを出す。

「まだ三十日もならないのにあんまり早過ぎる、ひどいぢやないか。歸って主人にさう言へ、借りて居たツて、逃亡しや爲さいから安心しろと。」

「さうも言ひますがどうか是非今日戴かせて。」

「くどいな。乃公の家では逃げると思ふのか。」

「ではございませんが——實はその私どもの旦那が逃亡いたしますので。」

(三五)二度の金

あらたに亞弗利加から黒奴を雇ひ入れて、面白がっている。面白がっている事を問ふ。「御前の舊主人と云ふのはよく金を儲けたかあ。」「はア、よく儲けました、艸と牛とで一年に二度づつ金にしましたよ。あれから金残って仕方ありません。めえ。」「どう云ふ工合ひにしてかね。」「面白くもでがすよ。秋口になつて枯れ草をすつかり刈つて皆賣り、押つて金にします。」「あるはど夫が一度だね。それから。」「すると草をみんな賣つて了つたで牛の食ふものが無くなりまさ、牛はころころ死んで了ふ、すると春まで掛かつて其皮を剥いて賣つてまた金にします。」「何だ、馬鹿な。そりや一年こつきりだろ。」「どうですかな。」

(三六) 十日前の鮮魚

また前の黒奴に吩咐けて魚を買ひにやると、やがて一散に魚肆まで飛んで行ッて、いきなり一疋の魚を取りあげて匂ひを嗅ぐので、魚屋は他の客の手前、陳い物でも賣るやうに思はれては爲らぬと大きに氣を揉んで、「何だ、この黒奴のマドロスめ、人前のわるい、腐ッてなッぞ居るもんか」と奴鳴りつけた。

例の空癡をつかつて頓智の有る黒奴は少しも噪がず、「私どうも爲ませんよ。」

「匂ひを嗅いたぢやねエか。とぼけるかい。」
「匂ひなッぞ嗅ぐもんですか。」

「現在乃公の見て居る前で今嗅いたぢやないか。」
「ありや、そツと咄しをして見たので。」
「うツす、乙ウ言ふせ、咄しをして見たと援けやがッた。そして何と云ッて咄しをしたんだ。」

「咄しですかい、咄しはね、海の様子はどんなだッて聞いたのでさ。」

「さうしたら魚は何てツたね。」

「知らあい、忘れちまつたと言ひました。」

「忘れる奴が有るもんか。」

「でも魚が斯う言ふンでさ。何しろ十日も前に海を出て、それから水を取ッ換へられたり、氷づめにされたり、

とうとう結局に斯う稀醜にまでされたから、すツかりど
うも忘れちまつた。海を出たのが十日も前ですとさ。
はい左様なら。」

(三七) シェリダンの靴

有名な滑稽頓智家、日本で言へば一休、曾呂利とも云ふ
べきシェリダンが或る日いつもの見すばらしいに似ず、
素敵も無い、それこそ王侯貴人が穿くやうな靴を穿いて
市中へ出たので皆おどろき、且褒めそやすと、シェリダ
ンいとど得意にあつて、「諸君、どうして僕が此靴を穿く
ことを得たか中てて見たまへ」と言ふ。いろいろに中て
たが皆外れた。中はどでシェリダンはきツと制して、「諸

君、こればかりは中らない。きツと中らない。これに限
ツてシェリダンは正金の現金で自身に買ツたんだもの。」

(三八) 汽車の穴

日日汽車に乗って歩いて居る客の一人が其日日の観察か
ら心づいたと云ふいろいろの馬鹿。

〔一〕 貸錢を取りあがら施行でもする様に尊大な札賣りの
馬鹿。

〔二〕 すべて、然うですと答へるべき場合ひには返辭を吝
しみ、さも無い時には大喝する一駄の掛員の馬鹿。

〔三〕 身装によつて取り扱ひや言葉づかひを違へる驛夫の
馬鹿。

〔四〕定員以上の札をうっかりと賣らせでしまふ驛長の馬鹿。

〔五〕一等車の聯結してあるか無いかも知らず勝手に賣つたり賣らふかつたりする札うりの馬鹿。

〔六〕わざわざプラットホオムの邪魔なところへ郵便物の袋を取り散らす郵便係の馬鹿。

〔七〕プラットホオムへ大砂利を敷く保線課の馬鹿。

〔八〕下車した客の混雑中をも憚らず荷物運送車を押しあらく荷物係の馬鹿。

〔九〕發車の前まで客の居るのを憚らず待合室を掃除しはじめ骨をしみの驛夫の馬鹿。

〔一〇〕プロックを忘れて隣りの驛をうるたへさせる助役の馬鹿。

〔一一〕汽車を見かけて切符を切りはじめる途中停車場改札係の馬鹿。

〔一二〕公衆電報を受け付けあがら、おいそれと直に掛けぬ電信係の馬鹿。

〔一三〕坐睡をして木戸を閉めぬ踏切番の馬鹿。

〔一四〕小兒などに踏み切りを守らせる踏切番の馬鹿。

〔一五〕プラットホオムに金具などの落ちて居るのを知らぬ貌で居る赤筋の馬鹿。

〔一六〕プラットホオムの飛んでもない所に列車を駐める

機關師の馬鹿。

〔二七〕職務を大切にせぬポイントメンの馬鹿。

〔二八〕客をば立たせて、己は腰をかけて居るその局員又は社員の馬鹿。

〔二九〕とばけて二等室に乗る車掌の馬鹿。

〔三〇〕とばけて一等室に乗る助役の馬鹿。

〔三一〕發車の遅滞をあきらかに客に告げぬ驛長の馬鹿。

〔三二〕催促されてしぶしぶランプを持って来るランプ係の馬鹿。

〔三三〕手あらひ水を入れると客に云はれ、次の驛でと願おくり逃げる驛夫の馬鹿。

〔三四〕着車のとき戸を開けぬ驛夫の馬鹿。

〔三五〕發車のときしツかり戸を閉めぬ驛夫の馬鹿。

〔三六〕わが驛のことより外を知らぬ驛員の馬鹿。

〔三七〕螢や蟬を動物と見做して賃錢を取らうとする驛員の馬鹿。

〔三八〕狂った時計を澄まして出して置く驛長の馬鹿。

下略

(三九) 反覆

「おや紛れ犬が来たよ。犬ッぶりが大分好いからきツと誰か捜しに来るにちがひない、さうすりや直に禮だ。何しろこの狭い一本道の街道だから間ちがひッこは有りや

しない。どれ繫いで置け。おおボチや、可いよ可いよ。
 可哀さうに、うんさうか。主人にはぐれたか。待ッてる、
 今に誰か捜しに来やうから」と蚤取眼の茶店の神さん、
 とうとう犬をつなぎとめて、やがて通行の人を一人毎に
 呼びとめる。

「もしあなた、嗚呼好い犬、あなたではございません
 か。」

「いいえ、私のぢやありませんよ。」

今度はまた次ぎの人に、「何てへ奇麗な犬だる、まア、
 もしあなたのでしよ。」

「私は犬なんぞ連れちや歩きません。」

今度は又そのつぎの人に、「伶俐さうな犬だこと。もし、
 この犬はああなたのですか。」

「犬なんぞ飼ッた事ありません。」

「ちよッ、爲様が無いさ。それぢやその次ぎの方、こん
 な好い犬」

「いいえ。ほかの人のでしやう。」

「ええ面倒くさい」とぢれ出して、「駄目だ。もう誰も来や
 しない畜生め、誰も来あけりや見るのも不好だ。貧乏神
 の宿さし犬。出て行きやがれ。」

おもひも掛けぬ棒の一撃。犬こそは好い面の皮。

(四〇)一人前の天氣

悪女に思ひつかれて煩はしくてならなかつたところ、また不圖往來で遇ふと、一所に歩かうと言はれ、別にことわる口實も無いので、仕方なく天氣にかこつけ、雨が降りさうゆるる天氣の好い日にしやうと云って虎口を免れたは可かつたが、その次ぎの雨も降らぬ日、運わるくぱつたり遇つて例のとほり同行を勧められた。

「今日は降りませんから可うございませう。」

「さやうさ、微曇りですね。降るか知らん。」

「大丈夫、降りやしませんよ。」

「それでも今日もいけませんよ、この空おひでは。」

「なせ。」

一生の智慧をしぼって、「快晴と行かぬ半晴、すなはち一人前だけの天氣です、二人前は有りません。」

(四二)その他の益

俳優に向かつて、「喝采といふことは役者の心をしっかりとさせるに違ひ有りませんね。」

「まったく度胸がすわりますよ。」

「思へば君たちには必要有益なものですな。」

「さやう、まだその他の益も有りますよ。何、喝采されて居る間大呼吸が吐けますよ。」

(四二)泣いた譯

六歳ばかりの幼児から、裁判を開くことにあり、原被と

もに出廷し、もとより双方の辯護士も附いた。その幼児は原告で、やがて辯論も稍終りとありかけた所へ來ると、情が迫ったか幼児はたちまち泣き出したので、言ふまでもなくその泣き聲は大いに満座を感動させて、美事つひに原告の勝利となつた。一兩日後に幼児が自分の辯護士の顔を見ると、「伯父さん、此間つめられた痕がこら」。

(四三)吾を忘れる

ある法律家が馬盜賊の辯護士として法廷にあらはれ、雄辯滔滔いかにも理を攻め道を究めるやうに述べ立て、遂に裁判官の心をさへ充分に罪人に同情を寄せるやうにさせ、その極とうとう無罪放免とならせた。その後辯護士

がその男にむかひ、「今御前は過去の犯罪について何と思ふ」とたづねると、つくづく感じ切つた様子で、「實際犯罪した覚えは有りかからず、いかにも一理有るやうな貴下の先日の御辯論を承つて後は、どうしても犯罪した本人たる私からして犯罪したとは思へなくなりましたよ」

(四四)金もちの心がけ

富豪ロスチャイルドの許へ金貸しが來て、「どうも弱つたことが出来ましたので、それで智慧を拜借にあがりました。一萬圓を貸したところがその男め斷りなしで外國へ逃げて了ひましたのです。信用貸しも信用貸し、證書も有りません。行つた先ですか、そりや解つて居ますが、

それだけです。「よろしい、催促状を出しなさい、御貸し申した五萬圓をどうぞ御返却くださいと書いて。」「一萬圓ですよ金は。」「ところを故と五萬圓としてやるのです。さうすると驚いて、五萬圓では無い、一萬圓だと返事が来まじやう。身に弱味が有るから大抵来ます。さすればその返書が立派な證書でさ。」
 この手段で金は遂にもどつたと云ふ。

(四五) 斂蛇

何でも野卑なことは大きらひだと言ひ續けて居るある令嬢が語學者某の許を音づれ、「この回御發行になりました御編纂の辞書は實に上品で、近頃比類はございませんの

ね。「さうですか」と學者は微笑して居る。「ほんとはございますよ。いやしくも野卑、猥褻、破倫、不道德に關する語は一切有りませんものを。」すると學者の微笑は嗤笑となつて、「あはッ、それぢや夫等の語を御さがしあさいましたね。」

(四六) 神佛

佛のために通夜するのを好い事にして村中の者どもが底ぬけに酒を飲むのを見て、列席の一人の男が苦苦しい事に思ひ、「何と皆さん、いづれも何時死んで佛に爲つたとか何とか云はれるか知れませんが、本當は生きて居る内から佛と云はれたうございますよ。」「さよですな」と異

口同音。「まつたく貴下がたも然うですかね。」「ええ、もう、それは。」「それぢや御免下さいよ。」
 すぐに酒道具一式をどしどしと片附ける。一同呆氣に取られて見て居るばかり。例の男は澄ましたもので、「佛てへものは酒飲みませんよ。」

(四七)新聞記者の苦痛

新聞雑誌の老記者がその職業の人知れぬつらさを青年記者に言ふを聴けば、一寸してもこれだけ。

〔一〕政治種が多過ぎれば、硬過ぎて、つぶしたての獸肉消化に骨が折れると云ふ。

〔二〕政治種が少過ぎれば軟過ぎて、粥と親類の飯、糊に

したら可からうと云ふ。

〔三〕字が細かかったり行間が狭かたりすると、讀みにくいと云ふ。

〔四〕字が大きかったり行間が廣かたりすると、讀み處が少いと云ふ。

〔五〕洒落をすこし多く入れると、地口行燈の手間取りと云ふ。

〔六〕またそれを少しにすると、石佛だといふ。

〔七〕電報を多く載せると、切山椒新聞だと云ふ。あせたと聞くと、いづれ捏ぢなほして切り刻んで出したものだからと。

〔八〕またそれを少せうくすると、財政困難、電報料にも差し支さしへるからだと云ふ。
〔九〕新作の小説を出せば、もつと好いのを選えらんだらばと云ふ。

〔一〇〕古作こさくのを出せば、原稿料げんこうりょうが要いらないからだと云ふ。

〔一一〕攻撃こうげきしても庇護ひごしても偏頗へんぱだと云ふ。

〔一二〕まるで中立ちゅうりつを守れば愚圖ぐづだと云ふ。

〔一三〕會計けいけいの仕拂しはらひが濫よほれば、その筈はずだ新聞社しんぶんしゃだものを一口ひとくちに云ふ。

〔一四〕またそれをすらすらと爲なれば、奴やつめ賄賂めいろうを取とったまと云ふ。

〔一五〕廣告くわうこくが少せうければ、紙かみが澤山たくさん出でぬからだと云ふ。

〔一六〕又またそれが多おほければ、割わり引ひきをしたればこそだと云ふ。

〔一七〕附録ふろくを添そへると、賣うれなくあつた故ゆゑの賣うり出だしたと云ふ。

〔一八〕又またそれを添そへぬと、不勉強ふべんきやうだと云ふ。

(四八)牡蠣かきの尺しゃく

「おい、その牡蠣かきを買かはう。一斤きんいくらだ。」

「これは合あ勺しやくで賣うり買かひしますのです。」

「さうか、合あ勺しやくか」とずんと心得こころえて、「それぢや六尺しゃくだけ賣うッてくれ。」

(四九)闇黒

洋燈のそなへは二つ有るのに節減から一つしか點火して
ない。丁度その車室に驛長も乗って居たので、これさい
はひと口のわるい二人づれ。

「驛長、會社も如才なく此頃は一目小僧をもやとひまし
たね」と一人が言へば、

一人が透かさず、「道理で闇の方がよく見える。」

(五〇)猶うれし

有名な聖が盛會に於てかれこれ三時間にもわたる長い
説教を行ひ、慈善のたふといこと、恵みの施しを吝しま
ぬことを説き、末に至りてどうぞ此會に御臨みの諸君へ

是までとても然うでございましてらうが、此上とも猶ひ
ろく恵みの施しを爲さる御心がけに爲つていたたきたう
ございますと述べると、満場いかにも同意を表した。
中に一人の客齋の男が有つて喜びその面にあらはれた
のを見て、その性質を知るものが不審に思つて、何がそ
んかに嬉しいのですと問ふと、「でも皆さんが施し好きに
なれば、是からますます私は儲かりますものを。」

(五一)両極端

「いや是は久しぶりだね。それでも御達者で何よりだ。」
乙「おたがひにさ。しかしどうも見ちがへるばかり君は
瘦せたね。」

甲「まッたくさ。又その反對で君はかそろしく肥ッたも
 ンだ。それでも身に異状は無いのかね。」
 乙「無いとも。だが、よくも君は瘦せたものだ。まるで
 滋養分をば入れないンだらう。」
 乙(賣り詞に買ひ詞で)「またよくも君は肥ッたものだ。
 食ひつけあい物を御馳走にあッたんださ。」

(五二)夫婦と朋友と

身長の高い人は低い女を好み、おしやべりの男は無口な
 女を好み、派手な男は質美な女を好む。夫婦間の選擇は
 兎角反對に趨りたがるのが多くて、扱朋友はとあると同
 氣相求め同類相應するであければ爲らぬ (サムスリック)

(五三)顔料

小兒「伯父さん、御前のつかふ繪の具は何てへものさの。」
 伯父「繪の具を私すこしもつかやしさい。」
 小兒「家のおツかさんが口へつけるのと同じさのかえ。」
 伯父「すこしもつかはないと云ふに。」
 小兒「嘘、鼻を染めてるぢやないか。」

(五四)大人しかッた

「今日の御法事の時、坊やはほんとに大人しかッたねえ、
 みんちが好い兒だッて褒めてたよ」と何も知らぬ老母が
 言ふと、坊やは澄まして、「あ、おとッさんの坐睡が覺め
 さいやうにと思ッてさ。」

(五五)今さら損

「おばあさん、天照皇大神さまに祖母さんは有ッたら
うか。」

「さうさね、日本のはじめの神さまであるらッしやると
云ふから祖母さんは無かつたらう。」

「ぢや仕合はせね。」
「あせ。」

「三百安にあらあかつたる。」

(五六)家の神

「おツかささん、家にも天照皇大神さまがゐらッしやる
のね。」

(五七)熊手

「ああ、神棚にあのとほり。」
「ううん、神棚であく——活きて、動いて。」
「誰のこと。居やしあいよ。」
「ううん、居るよ、おとツさん。御金取る人が来ると、
いつでも戸棚へ入るだる。あとで阿父さんがさう言ッた
よ、岩戸がくれたッて。」

箱根もよりの百姓家へ、散歩の途すがら湯を飲み立ち
寄ッた一組の西洋人が有ッた、中に一人の男の兒が居て
目まぐるしく其邊歩きまはッた末、とうとう馬小屋から
松葉搔きの熊手をさがし出して來た。

「何、いたづらするのだよ、汚いものを」と母親が叱ると、

「いらえ、見せやうと思つて持つて來たの、これ御覽あ、馬のフチーク（肉刺）よ。」

(五八) 鶴の頭

「おツかささん、鶴の頭がおツこつて居たから拾つて來たよ」と勢よく六つばかりの子が入つて來た。

「鶴の頭がえ？どれ御見せ。何だえこりや折れた釣針の鈎ぢやあいか。」

「でも」と手で書く真似して、「つる、そら御覽なねつの恰好してるだる。」

(五九) 國あまより

總代にあつて奥羽の邊から上京し、いろいろ盡力した甲斐が有つて首尾よく好結果を得たに就いては一刻もはやく國許の人をも安心させてやらうと直に「ホチチリスンダ」と電報をかけると、程無く「イマヒキトリニユク」との奇妙な返電が來た。譯はわからぬが其儘にして置くとそのつぎの日二三人の者が上京して尋ねて勿怪な貌して、「骨折り死ンダ」といふから慌てて來たのに、扱は例の奥州あまりの失策かとしまひには双方大わらひ。

(六〇) 先客

「退かねエか畜生、どかねエかやイ。」

「權助、御前一人で何を云ッてるんだ。何だッてさうぴしやびしや自分の顔を叩いて居るんだ。」

「何さ旦那さま、この日の奴め俺が斯うしてる處へ来てこのとはり俺の顔さ照らすンで、それで退けると云ッてるンで。」

「無理者事云ふ奴だぞ。どうして日の方が退けるもんか。それより御前が身體をすこし他へ去らせりや可いんだ。」

「いやだ、俺が退く法は無ら。」

「あせ退く法が無いんだ。」

「だッて俺が先客だ。」

(六一)寐すでし

「起きあいか、もう時間を大變過ぎたよ。汽車あらもう乗れあいなだ。九時だ、かれ是。」

「あ、さうか、そんから明日の次ぎの發車まで待つとしやう。」

(六二)その筈

「おツかさん何してるの。針をさがしてるの。」

「ああ、針が見えるさくあッて今一本だけ探し出したけれど、」

「さう。針は三本無くッて、一本は縫ひかけの袷の襟から出たかい。」

「よう知ッてるね。」

「あたしが匿したンだもの。」

(六三)然らば則ち

「金坊や、これからあの太郎さんと一所に遊ばあいやうに御爲よ。いいかえ、あの兒は歹い兒だから。わかつたかえ。」

「わかつたよ。もう遊ばあい。歹い兒から悪人だね。」

「ああ悪人だよ。」

「可し、そんなら喧嘩するンから可いンだろ。」

(六四)數理

「先生、一から二は取れあいでしよ」と涙ぐんで七つ

ばかりの兒が教師に。

「さうですとも。だが、どうしました。」

「さう思ッて安心してゐましたら、五郎さんが私といふ一人から密柑の二つを取りました。」

(六五)抜きそこあひ

母親の白髪を父親がしきりと抜いてやツて居るのを四つばかりにある女の兒がぢツと視て居たが、やがて手つたふつもりで、一所にあツて抜いたところが、是はしたり、黒い毛なので仰天して、「大變、おとッさん、植ゑあはしてよ。」

(六六)虚心者

虚^き心^{しん}者^{もの}のはあし一つ二つを下^{した}にしるす。實^{じつ}地^ちにかう云^いふのが有^あるから世^よの中^{なか}といふものは面^{おも}白^{しろ}い。

ある男^{おとこ}がしたたか雨^{あめ}に濡^ぬれて歸^{かへ}つて來^きて、その癖^{くせ}ねむたくてあらず、慌^{あわ}てて傘^{かさ}を疊^たんで臥^お床^この中^{なか}へ寐^ねかし、自分^{自分}は土^{つち}の間^まの隅^{すみ}で高^{たか}いびき。

ある男^{おとこ}が首^{くび}を縊^くらうとして踏^ふみ石^{いし}の上^{うえ}へのぼつたのは可^よかつたが、索^{あは}を首^{くび}へ巻^まくの忘^われて、やがて管^{あし}はず足を外^はすと、づでんどうと身^み體^だは仆^たれた。「あ、痛^{いた}」と先^{せん}生^{せい}顔をしかめて、「首^{くび}をくくると腰^{こし}が痛^{いた}いもんだてよ。」

ある男^{おとこ}が、寒^{さむ}い夜^よであつたが、暗^{くら}闇^{やみ}の臺^{たい}所^{じよ}へ行^いき、雜^ざ巾^{きん}で顔^{かほ}を拭^ふくとて、鮭^さの頭^{あたま}をそれと思^{おも}つて取^とつて引^ひつこ

すり、「寒^{さむ}い譯^{わけ}だ、こんか^こに凍^こつた。」

ある男^{おとこ}が餘^よ所^{じよ}で足^{あし}袋^{ぶくろ}を間^まちがへ、半^{はん}分^{ぶん}は白^{しろ}、半^{はん}分^{ぶん}は紺^{こん}のを穿^はいて澄^そまして歸^{かへ}つて來^くると、丁^{ちやう}度^どまたその女^{によう}房^{ぼう}は近^{ちか}眼^{がん}で、「あら、また此^{この}人^{ひと}は片^{かた}足^{あし}襦^すへおちて泥^{どろ}にして來^きたよ。」

ある女^{おんな}が烟^{きん}管^{ぱん}堀^ほりの細^{ほそ}い火^ひ箸^{ばし}で雁^{がん}首^{くび}を掃^さ除^{じゆ}したり、火^ひ鉢^{ばち}の炭^{すす}をかほしたりして居^ゐたツけが、その儘^{まま}澄^そましてその火^ひ箸^{ばし}で裁^{さい}縫^ひにかかつて、「恐^{おそ}ろしく緊^{きん}縮^{しゆく}む針^{はり}だこと。」

ある男^{おとこ}が眼^{がん}病^{びやう}でつねに眼^{がん}藥^{やく}をさして居^ゐたが、ある時^{とき}も瓶^{びん}の儘^{まま}眼^{がん}へ持^もつて行^いき、いつものとはり射^ささうとして、不^ふ圖^とどうしてかラム子^{らむこ}を瓶^{びん}の口^{くち}から飲^のむことを思^{おも}ひ出^だし、

眼へは射さず、その薬をがぶりと口へ飲んでしまった。
 ある哲学者が急いで校門を出て、「はたと牛に衝きあ
 った。びっくりし、急に帽子を取つて、どうも失禮、御免
 下さつて」と云つて行き過ぎると思ふ間もなく、また一
 婦人に衝きあつたが、たちまち叫んで、「又ここへ來居
 ったか牛め。」

ある女が情夫に送られてわが家の門口まで來、いざ別
 れるとあつて、戸を叩く手つきでした。たかに情夫の横面
 を敲き、それから戸に向かつて、「さやうから。」
 栗だ枝豆だ茹玉子だといろいろ剣いで食べるものの澤
 山有つた中に又つぶして食べる葡萄などもあつた。あれ

これを食べ、口で居る中次第に混雑して來て、茹玉子を
 売の儘噛みつぶして、「いやどうも堅甲鐵砦だ。」
 急いで乗り出さうとして馬具の支度をし、いつか鞍を
 わが背へ着けて、「はて今日は鞍がめづらしく迂るよ。」

(六七)泣いて來る

「御前のおとツさんは御醫師をして居るさうだが流行る
 かい。」

「はやるよ。いろんあ人が御禮を持つて來るよ。」

「そりや強氣だ。それぢや治つてみんあ嬉しがつて來
 るんだ。」

「いらえよ、みんあ泣きあがら。」

(六八)桃三つ

「もつと御くれあおツかさん、桃を。」

「おんまり食べると毒だよ。籠にいくつ有るえ。」

「三つ。」

「さうだろ。一つはおとツさんの、一つはおツかさんの、それから一つは御前の。一つだけあら食べても可い、その上はいけあいよ。」

その一つを食べて了って又ねだりに来た。

「だつてもう二つしか残って居あいだろ。」

「ああ二つ、一つはおとツさんの、一つは私の。」

「おツかさんののは。」

「そりや先刻食べたのよ。」

(六九)女ころし

七つばかりの小児が十八九にある兄に向かつて、「兄さん御前は女ころしだよ。」生意氣な語に兄はびっくりして、

「あせ。誰かそんな事言つたのか。」阿花さんがさう言つたわ、兄さんが洒落とかを云ふと阿花さんはをかしくツて死にさうだつて。だものを、女ころしだろ。」

(七〇)讓與

「御前のおとツさんが義齒をしたと云ふね。残らずかえ。ふん、あるほど、總入歯か。御前のおとツさんも入歯するやうお年にあつたあア。年の寄るといふのは早いもん

だ。それに就いて御前は何と思ふ。」

「ありがたいおとっさんだと思ふ。」

「ありがたいとは何故。」

「思ひ切って取り代へて、前のをばそっくり私に譲るのだからから。」

(七二) 捷徑

ふとツた人が急いで田舎道を歩きながら、立って居た小兒に向かつて、

「ステエションへ行く捷徑は何處かね。」

その詞つさが尊大なので小兒は返辭もしから。

「え、どうしたら早く行けるだらう」と云ふと、

「をぢさん、御前あるくより横へころげて行くと可いや。」

(七三) 残念

小兒が路傍で、「あ、無い、あッあ」と泣いて居る。

通りかかりの老女「おや可哀さうにどうしたの。え、

どうしたの。怪我、ぢやあいの。」

「御錢をおつことしたの。」

「さうかえ、いくら、何、一錢だとえ。いよいよ、その

位からあたしが上げるから。さア泣かあいで御かへり」と一錢わたす。

受け取って、「こんから五錢と云つたものを。」

(七三)ためし
「御新造さま、あたくしの櫺を御ぞんじありますまいか
知ら。」

「知らあいな、御前が何處へか置いた、その置いた所
に在るのだろ。」

「その所を御存じありませんか。」

「知らないやね。そりや御前の物は御前が始末しあけ
りやならないぢやあいか。いやだよ此女は、天窓の上へ
さしてゐるぢやないか。」

「や、わかつた。實は目が届くかどうかの試しなソで
すわ。」

(七四)鳥が羨ましい

「奇麗な鳥ね、おばアさん。何てへ鳥なの。」

「この鳥はね、鸚哥。」

「奇麗なことね、啼くの。」

「啼かないの能く。」

「わかつた。御湯つかはせられあいかからだ」と小兒は
何處までも小兒。

(七五)來る譯

「何を聞いても御前さんは答へができませんのね。學校
へ來る甲斐がありますか」と教師ぢれこめば、

「それだればこそ教はりに來るのです。」

(七六)うぬぼれ

「權助、御前知ッてるかあ、今から凡二十年前には無かつたが此頃では無くてあらぬ、おそろしい重寶ものを。」

「知ッてまさ」とにやにや笑ふ。

「よく早くわかつたな。何だ。」

「私でがす。」

(七七)馬にありたい

小僧が主人に向かひ、「旦那、馬がどうしたンでしよ。あばれて居ますよ。」

「うむ、暴れて居る。主人の言ふ事を肯かあいなだ。」

「あの人がそッと馬の肩の處を叩いて居ますが、あり

や何うしたンでしよ。」

「馬をおだめすかして居るんだ。」

ちツと考へ込んだが、小僧はたちまち涙ぐんで、「ああ馬になりたいなア。」

(七八)吊床

商船乗り組みの黒奴が霧の深い朝上陸して港の近郊を散歩して、その霧のかかつた蜘蛛の巣を見て、「うむ、兜蟲の吊床が有るわい。」

(七九)目前主義

父「さてくはしく咄して聞かせたから新井白石はどういふ人、また今の何某侯はどういふ人、と云ふ事がよくわ

かッたらう。」

子「すっかりよく解ッたよ。」

父「御前はどツちが好いと思ふ。どツちのやうに爲りた
いと思ふ。」

子「何某侯。その譯かい。それでも何某侯はまだ死なな
いもの。」

(八〇)父の金

「おとッさん、また御無心だがね、どうか百圓ばかり貸
して下さいな。」

「御前の貸せ貸せも久しいもんだ。それでいつでも返
したことは無しさ。」

「おツと、わかりました、地藏の顔も三度でしやう、
その後ほ。」

「馬鹿にするか、いつまで氣樂な事を言ッてるのだ。」

「まづ分別のとツくりと附くまでですかね。」

「これ、よく聞け。すべて生物は自分ではたらいて自
分で世を過して行くべき筈のものだ。乃公などだッて

御前ぐらゐの時はもう親へ一一手頼りは爲あかッた、況
んや親父の金あどを費ふやうな事は更に無かッた。」

「謊言おツしやい、そりや謊言です。御前さんは私の
おとッさんの金を今現につかッてるぢやありませんか。」

(八一)うなぎ

「これは伯父さん、あんまり好い香ひがする、はてなと思つたら伯父さんの御宅から匂ひますので、とうとう嗅ぎ付けて御相伴にあげりました。此鼻の鑑定果たして過たずで、見ればそれそのとほり重函が……いや御蒲焼が御卓子の上にある。」

「何だいつくもおを附けて。」

「御土産のしるしの御世辭に。」

「ふざけるぢや。だが凄まじい鼻だな、並はづれて低い癖に。」

「ひどいこりや、後がはげしい。ですが好い鰻鱺ですね。」

「見もしかいで。何でも可い、そんなに食べなければ相伴させてもやらうが、併し御前此頃は何して居る。なに、相變はらず何も爲あいんだと。仕様が無いなア、御前の親父が息を引き取りかけた時も、あの蒼白い瘦せた顔で細オい目を見開いて……」

「あはッ、大分調子がうまくなつた。」

「だまッて聞け。御前のことをくれぐれも苦勞にして私にも頼んだ、その事は知ってるだろ。」

「知ッてます。」

「それだのに何もせず、好い年をしあがら毎日ぬらくらばかりして。」

「ぬらくらして居ちやいけませんか。」

「當り前よ。」

「その鰻鱺は。」

「さうさ、この、これは、ぬらくらする。」

「伯父さんの前ですが、私は深き慮り有ッてそれを眞似て居るンでして、へい。ぬらくらして居ても、取り所が有ればこそ人が捕る、旨味が有ればこそ伯父さんも食べなざる、何とどうです參りましたる。」

「その代はり、よく聞け、背筋から豎割きにされて串にとはされ、揚げ句の果に火炙りにされて、むしやむしや食はれて了ふンだ。どうだ、まるツたる。」

「なるほど、それでうあぎと云ふンだな。」

「何がそれでだ。」

「愛い難儀と言ふ譯でしよ。」

(八二)胃病の妙薬

富察の胃病患者、「はじめで先生には御診察をねがひます。是までに諸先生を煩はせましたが、どうしても此胃病が治りませんでか。」

國手「そりやえらい御困りでしやう。」

「方方の宴會へ出るたのしみも有りません。況て朝夕の食事にも張り合ひが無く、家人どもがつまらぬ物を旨さうに食するのさへ羨ましいほどでしてあア」と如何に

も残念らしく云ふ。
「ごもつともです。折角よく私の申すとはりに爲さる
あらば一つ治療法を御咄しいたしましやうが、よく守れ
ますか知らん。」

「病ひには代へられませんが、どのやうな薬でも。」

「薬ではとても治りませんから、只療法だけ御はなし
爲ます。まつと御守りあさいますか。」

「はい、どのやうな事でも先生の御言葉ならば。」

「さらば御はなし申しまじやう。他でもありません、
一日二十錢づつの賄ひでしばらく日を御おくりあさい。
もちろん二十錢の中に菜も米も入るので、その二十錢も

あなれが自身何なりしてはたらいで御取りあすつたのに
限るのです。妙法このほかに有りません。」
富豪も一度は呆れたが、考へて見ると道理が有るので、
やがてそのとほりに爲ると終に難治の胃病が五週間はど
で治つてしまつた。

(八三)子だから

學校へ行かうとして着物を着るは着たが、羽織が汚れて
居るとして氣に病んで居た小女が何か考へて居たが、やが
て母のところへ来て、

「おツかさん、家のねエおとツさんは御金もちあなの。
妙お問ひと母も用心して、「ああ、大層お御金もちあなの。」

二百五十萬圓御金が有るのよ。」
 さすがに驚いて、目を睜ひらつて、「ええ、二百五十萬圓、ほんとかの、おツかささん。」

「ほんとだとも。くはしく云はうか、私が百萬圓でそれから御前が百萬圓、それから花坊やが五十萬圓、あはせて二百五十萬圓だろ。」

感心して、「うれしいわ。それぢやね、おツかささん、花坊やを五十萬圓に賣うつて、それで私わたしに奇麗きれいな衣服いふく買かつておくれあ。」

(八四)問答

「旦那さまは學者がくしやだつてへ近所きんじよの評判ひやうばんですから、伺うかがひに

あがりましたが、一いつ躰たい人間にんげんてへものは誰だれでもみんな死ぬもんださうですが、ほんとですかい。

「誰だれかと思おもつたら八はちさんか。そりや人間にんげんに限かぎらず生有しやうあるものは必かならず死しにます。」

「ぢや宅たくの河童野郎がわぢやわらうは死しあねエや。」

「何なんです河童野郎がわぢやわらうといふのは。」

「えへッ、宅たくの鬚ひげつけ鼻はなの餓鬼がきで。」

「鬚ひげつけ鼻はなとは誰だれのこつてす。」

「私わたしの鼻はなでさ。甘薯かんしょが好すきで、その中なかでも水薯みづいもがとりわけ好すきですから。御前ごまへさんの方はたからあべこべに聞きくんですな、學者がくしやの癖くせに。そんなだと持もつて歸かへりやすせ持もつ

て来たこの菓子くわしの折あひを。」

「どうでもしかさいだが、御お見こさんが死しなさいと云いひあすつた、それはどういふ譯わけで。」

「河童かどう野郎やろうでげすかい、それでも全まるツきりの性しやうち無しで、小言こごも何なにも御通おつうじなしですもの。生しやうち有あるものは死しぬと云いひあすつたでしよ。で、彼奴あいつはさツぱり性しやうちが性あいので。」

「その性しやうちぢやない、私わの言いつたのはいいのちちの生しやうちだ。」

「はア、いいのちちの生しやうちでげすかい。そんならきぬけのしやうはしやうはしやう洞忘どうりれで、たぬきのしやうはしやうはしやう腹鼓はらづみで、うはしやうはしやうきのしやうはしやう水性すいせいで……」

「おいおい八はちさん、御前おまへ何を言いひに來きたんだ、冷ひやかし

に來きあすつたのかい。

「さうでしたツけ、聞きくのを忘われまれしたツけ。誰だれでも

みんな死しぬんですね、たしかに。」

「そりやもうたしかだ。」

「さア、茲こゝが聞きき處ところだ、何なにしろ熊くまや七しちと大おほさわぎして拵こしらへて來きた難問なんもんあんだ、よしかね。」

「何なにだ、よしかねななンて。」

「こツちのこツた。さうすると終尾しゆへにはみみんな死しにましよ。」

「さうさ。」

「一時いちじにますか、それとも別段べつだんに。」

「そりやどっちとも知れないね。」
 「どっちでも可い。何しろ死にましょ。その時に、さ、旦那、早桶は誰が拵へます、引導は誰がわたします、穴へは誰が葬ります、一周忌は誰がします、さ、こればかりは分かりませぬ。萬歳、勝ったアイ。ヘン、學者だッて何だ。」

(八五) 永眠

死ねばそれツきり、永くその儘にあッて了ふと云ふ事を子に言ひ聞かせ、河や汽車路で遊ぶのを謹ませるやうにして居たところで、其子がある日伯父と共に川岸を通りながら、

「伯父さん、水へ陥ると死ぬのよ。」
 「さうか。死ぬと何うする。」
 「一生の間死んでるんだとさ。」

(八六) 混和水

「おい牛乳屋の小僧、御前のところの乳には不潔な水を交せるやうだ。」

「いえ、どういたしまして。」
 「どうも然うらしい色澤だ、斯う見たところ。」
 「大丈夫でございます。」
 「近所の人もさう云ッてるよ、己ばかりぢやない。」
 小僧やツきとあッて、「嘘です、いつでも濾さあけりや

混ぜません。」

(八七)大きな鯉

汽車の中でさまざまの咄しがある中で、一人の男が誇り顔に昨日とか釣りに行って目方五百匁も有る鯉を釣ったとしやべって居ると、一人がつくづく聞いて居てやがて口を出して、

「そりやえらいが、私も先日やはり釣りに行きましたところ、御咄しのやうな大手柄でした。」

釣りの咄しだけに釣り込まれて、さうでしたか、目方はどのくらゐの。」

「八百匁たしかにありました。」

「そりや珍らしい、よく糸を切られませんでしたね。」

「御まけに頭が八つありました。」

「いよいよ珍らしい。見世物にでも御出しなすつたら

可いでしやうに。」

「なに、一疋ではあいんですから。」

「かんですとえッ。」

「残らずで八疋です。」

(八八)親心

「作坊、どうしたんだい、その姿は。衣服は切れる、血は出る、蚯蚓脹れはできる、どうも困るぢやあいかねエ。また桶屋の小僧と喧嘩したんだろ。おっかさんがい

つも云ふぢやないか、彼奴と遊ぶどころか口を利くのも御止しと云ふのに。畜生、桶屋の小僧め、わるい奴だ。もう桶の直しを彼家へやるもんか。人の兒をこんか目にあはせて。痛いかえ。」

言はれてやうやう、「いたいよウ。」

「言はれてから泣く奴が有るもんかね。」

「折角だからさ。」

「泣くのに折角が有るから。」

「それでも氣の毒なもの。おツかさんの目には餘處の兒に斯うされたと見えるかい。」

「あら、マァ。」

(八九) 智辯

「おツかさん、奥の座敷の薄色の絨氈ねエ、あの上へ今僕は鹽をこぼしたよ。」

「よく氣を注げないからさ。はやく帚で掃き出しておしまひあ。」

「だがおツかさん、鹽をこぼして、人に因ッては恐ろしく叱られることも有るだらうねエ。」

「有るともさ。」

「鹽をさへこぼさなければ叱られる事はあるまいやねエ。」

「ああ、さうだよ。」

「鹽をこぼすのは歹いね。鹽をこぼさなければ叱られないやねエ。」

「くどいちやあいか、同じ事を。」

「でもおツかさん、本當はね、こぼしたのは墨あんだもの。」

(九〇) 月中の人

「おぢいさん、御月さまの中に人が居るの。」

「ああ、居るとさ。」

「さうすると今夜のやうに、あんな三日月さまに爲つた時は大變だね。」

「ふせさ。」

「あんな狹アい、明るい方へみんな來て居なりやあるまら。」

(九一) 相違の次第

教師「化學から言ッて金剛石は何です。」

生徒「炭素です。」

「もちろん炭素ですが、炭も炭素で、すでにその相違の次第は昨日説明したでしょ。さ、その相違のいもある點それを言ッて御覽あさ。」

「いもなる點——値段です。」

(九二) 協力

「坊や今日は佛さまの御法事だから金魚を玩弄にするこ

とは一日だけ御よしよ。」

「あら、今金魚殺したところだよ。」

「この兒は何だつて又選りに選つて今日そんな事を。歹い兒だね。」

「御法事だからやツぱり去年のやうに御ともらひの眞似しやうと思つたの、ああ、金魚殺して。」

(九三)見やう見眞似

「伯母さん、おあそびな私と一所に」と機械師の子がある老女を誘ふ。

「伯母さん遊べあいの。あせでも伯母さんは年をとつて身の動きがわるいから。」

「さう？」と云つたが、程なく油さしをわが家から持つて来て、「さア、をばさん、油をさすと動くもんだよ。」

(九四)御馳走さま

「權助、いくら教へても教へてもどうしたんだる御前の勘定のうといには。ちつと確りしなよ。さ、教へるからしツかりと、あれさ、そんなに力を入れると机の脚がもげらアな、もすこし身體浮かせて居ないかよ、ぢれツたよ。」

「身體、あはア、浮きませんや、水ン中でねエから、はア。」

「ちよツ、軽くすめツてると言ふんだイ。」

「秤出しなせエ、掛かッて見るから。」
「さうぢやあいなだ。力を入れずに樂に居ると云ふんだ。」

「いろんな事云ふぞ。だが、樂に居るたア忝ねエ。寐べらか。」

「何だ、勘定稽古してもらふのに寐るあッぞと。只端然と一所にすわッてりや可いなだ。」

「阿父と一所にや坐れねエや、阿父は國だもの。」

「言へば言ふほど解らなくなる。何しろさうして居る。はやく教へる方へ掛からう。」

氣の煉れた主人で、しきりに權助の面倒を見る。

「さア可いか。」

「よッしヨ來た。」

「馬鹿、相撲ぢやあるまいし、仰山あ。好きさうな物で教へて見やう。可いか、敷を寄せるだけあんだよ。大

福餅が五つさ、可いか、安倍川が二片さ、桃が十二に、可いか、梨子が一つ……」

「おツと、もしもし、一つかえ梨子は——吝だな。」

「ふざけるあ、それから羊羹五片に團子が二十に葛餅が四片……」

「へん、旨エのがとんどん出ら。」

「又ッ」と睨めて、「それを残らず——わかッたか。」

「わかりやした。御馳走、氣の毒だね。」
 「いやさ、今云ったのを残らず引ッくるめたところで
 何うだ。」

「えへッ、もツと食へるね。」

(九五) 褒美

「權助さん、御前さんの御主人は御前さんがよく勉める
 と褒美をくれるかね。」

「うん、褒美とか云ったッけな、よく呉れるよ、それ
 も一つどころか二つ位やッても可いと言ひながらだよ、
 その癖おれ別段よく勉めるつもりでもおいやうだがね。」
 「さうか、何しろそれは結構だ。水でもよく汲み込ん

だとか、庭でもよく掃除したとか云ふ時にくれるんだら
 うね。」

「うんにや、さうでねエな。」

「それぢやどんか事をした時に。」

「まづ坐睡でもするとか、使ひでも遅いとか、飯でも
 永エとか云ふ時にだな。」

「はて是は、面白い主人も有るもんだな。反対だ。そ
 して褒美は何かい、錢かい、おに、さうぢやあいと、何
 だえ。」

「拳骨さ。」

(九六) 猫の尾

「花ちゃん、その猫の傍へ御出ででないよ、御かまひでないよ。そのとほり尾をふッてる、手を出すとさッと引ッ搔くよ。」

「尾をふると引ッ搔くのかえ、姉さん。」

「怒ると尾をふるのよ。だから御管ひでない。」

「謊言。おや犬はどうしたの。」

(九七) 小心

「あの男にも困る。氣の小さい癖に口は毒が有ッてがみがみ言ふから誰でも腹を立ッてしまふ。」

「その事、僕も大きに心配して、どうか友だち甲斐には治して本人の損の無い様にしてやりたいと思ッて、あ

る人から一つ智慧を授かつて来た。見たまへ此顔のこんかに狭い儘。」

「それをどうするんだ。」

「是からあの男の所へ持ッて行ッて一つ諷諫とやッて見るつもりだ。何でも可い、一所に来て見るさ。」

つれ立ッて行ッて儘に水すこしばかりを盛り、やがてその男の見る前で茶碗の中へその水を注いで見せ、「どうだ、腹にすこししか無いのに限ッて此とほり口から出る音が太變だ。わかッたか。友だちの好誼に爲を思ッてわざわざ持ッて来たんだよ。」

その後その男の癖はよほど改ッた。

(九八)古物

「これは皆兄さんが持った玩耍、それから是はみんな兄さんが着た衣服、いいだる御前はこれを貰って。」

「みんな古物だ。」

「勿體ない事御言ひであり。結構ぢやないか、兄さんの所有品を譲ってもらって。」

「あいよ。さうするとね、おっかささん、もし兄さんが死んだ時にも然うなのかえ。」

「いやあ事を云ふ兄だよ。然うあのかとは何ういふ事なの。」

「いえね、そんな時や兄さんの御神さんをもゆづつても

らふのかえ。」

(九九)馬鹿の財産

「御前の眞面目にあらあいのも實に困ったもんだ。折角この私が丹精を凝らして拵らへた財産をその分では烟にしてしまふね、御前の代になつたら。馬鹿には財産の附随して居るものでないからね。」

「でありますまいよ、おとっさん。」

「またいつもの小理窟か、理を非に曲げて。」

「理を非には曲げませんが、眞實です。馬鹿には財産が附随せぬと仰やいますが、それぢや今の華族や豪商農などはどうです。」

「おツかささん、黒奴になるのはどんかに痛いだらうかね。よくみんか我慢するのね。」

「黒奴にゐるのに何が痛い。ちツとも痛いことはありやしない。」

「ううん、痛いわ。あたいで覚えが有る。」

「御前黒奴ぢやないぢやないか。」

「それでも、こら」と撲った痕の身の黒痣を示して、「たつた是ぱツかり黒くゐるのにさへ大變に痛かつたものぞ。」

(一〇一)大まぢがひ

「皆さん、さていよいよ今日から博物學の初歩を始めますから注意して聽いて下さい。茲に動物學名アニマルキユリイといふ動物が有る、その動物はすべて肉眼をもつて容易くは見られぬもので、水の中あどにも澤山に居るのです。わかりましたか。わかッたら一つ答へて御覽下さい、あかた」と一人の生徒を指す。

「ええアニマルキユリイといふのはすべて容易くは見られぬほどの動物で、水の中あどにも居ります。」

「まづ大抵そのくらゐの答へなら可し、ところで夫等はどんかものか試みに名を知ッてるだけ舉げて御覽なさい。」

「ええ、鯨、水牛、象……」
 「御待ちッ——とんでもない、何のこツてす、そんな
 大きな物を。」

「それでもすべ。たやすくは見られぬほどの動物で水
 の中などにも居るといふぢやありませんか。」

(一〇二)をさる心

ある小學の尋常科二年生に出した題に對しての生徒の無
 邪氣な答案の一つ二つ。

善とは物を借りてちやんとかやすのです。

善とはもしそれを行へばうまい物を食べたやうな好い
 心もちがするものです。

悪とは自分だけ傘をさして、雨の降るのに友だちを入
 れてやらないのです。

悪とは人の見ぬところで偷食をします。

(一〇三)素封家

「先生、素封家といふのは何です。」

無學の先生、「先の先生が教へたでしやう。」

「教へました。」

「何と言ッて教へました。いろいろの義の有る語です
 からね。」

「ところが全で忘れてしまひましたので。」

「辞書を見ませんでしたか。」

「見ましたが有りませんでした。」
 「やッぱり義がいろゆる載せあかつたんだろ。」
 「何しろ、先生、一般に何と解したら可いでしやう。」
 もはや退引からあくあつて、「素封家といふのはね——素封をこしらへる人です。」

「その素封家といふのは何でしやう」と顔を眺める。

「素封といふのはね——その、あの、素い封蠟。」

生徒不思議な顔して居たが、無残やこの時真正の意味を憶ひ出して、「あッ、おもひ出しました、まへの先生の言ふには素封家といふのは金もちですッて。」
 「そりや、あの、その筈です——ですから義もいろい

る有ると云ふので。何しろ素い封蠟を支那でこしらへる、その製造場は大したもんで、とても金もちであければ出来ぬ、それから素封家と云へば金もちの義にもあるです。
 「あッ、御説も蠟びきだ。」

(一〇四) 學の祖

はじめて小学校へ入学し、はじめて一日の稽古を受けて、六歳になる兒が家へ歸つて、「おッかさん、世界のはじめ、はじめて人に字を教へたのは誰？」

(一〇五) 愛蘭氣質

英人(インド人)はアイルランド人を間抜けの比喩に引きたがッては嘲る、その一二。

またあるアイルランド産れの下男に吩咐け、機械の車に油をささせに行ると、ややしばらくして歸つて来て、「油をささうと思つたら車がちやんと大人しく心棒へかちりついてるから止して來た。」

(一〇六)まかへし

書物を貸してくれると友人の所へ使ひをやると、「御氣の毒ですが室外へ持ち出さぬ規則にきめましたから御貸し申すことは斷ります。が、もし御用なら此方へ来ていくらでも御讀みくださいまし」とのつれあい返事であつた。いまましい奴、いつか一度返報してくれやうと思つ

て居るところへ數日の後その男からの使ひが来て箒を貸してくれろとの事、べめたりとその使ひに傳言して、「御氣の毒ですが室外へ持ち出さぬ規則にきめましたから御貸し申すことは斷ります。が、もし御用なら此方へ来ていくらでも御掃きくださいまし。」

(一〇七)病氣の根

英のスウヰフト (滑稽文學家) が曰ふ、「アポルロ (ギリシヤの神) をギリシヤでは醫を司るともし、また病氣を司るともし、療治と病氣と双方を持たせて説いたのは面白いよ。數千年の今でも醫者は病氣の根だもの。」

(一〇八)乗客は仕合

また經驗の乏しい船長がはじめて遠洋航海をして歸つたので、まづめでたいと友人がそのために宴を開いてやつて、

「どうだツたね、乗客は皆愉快に乗って來た様だツたかえ」と訊ねると、

反身になつて、「大愉快。何しろ印度洋あどではみんな豆をころがすやうだツた。」

「あはッ、好い面の皮あ、それで愉快あもんか。暴風雨か。」

「ランにや至極平穩の天氣。」

「それで印度洋あどでそんなかに船を揉ませる事は無い

ぢやあいか。」

「おれがわざと揉んだのさ。」

「たまたまいね、どういふ譯で。」

「さんざん揉んで苦しませて置いて、それから涙のやはらかい所へ來て、やはらかく流したもんで、乗客の悦びと云つたら無い。船長の伎倆は大したものだツて。あはッ、これで皆大満足さ。」

(一〇九)同じ仕入れ

肖像畫工の所へある處の妻女が來て、「どうも好い肉色ですことね。かういふ繪具をつかふので顔だちが引ツ立ちますのね」と云ふと、

「えへッ、あかたが顔へ御つかひなさるのと同じので
す。」

(一一〇)天性

かしやべり極まる男に意見のつもりである婦人が、「すべて
人と云ふものは出傍題にばかり物を云ふものではあ
いのです。男子でも婦人でもおなじ事ですが、その中にも
取りわけ婦人は。もちろん婦人は男子ほどさう無鐵砲の
事を言ひませんけれども」と云へば、

何をと云ふ貌つきで顎撫であがら、「さやう婦人は男子
ほど無鐵砲の事を言はん、のであくて言へんのです、言
ふほどの力をもつて生まれて來たので。」

「さうでしやうか。」
「家鴨とあんなしことです。彼奴飛びたくつても飛べ
ないので翅を只ばたくさやツてるンでさ、うたひたくて
も唱へないので只ぎやツぎやツ言ッてるンでさ、早く歩
きたくつてもさうは歩けないので只でこでこやツてるン
でさ。」

(一一一)商賣冥利

毒氣でもありさうに顔色黒く黄を帯びたわが兒を友だち
に見せて藥屋の亭主、「これが私の悴で。」

「はて争はれないもンですな。」

「みんあさう仰やいます、私に活き寫したと。」

「それどころか御商賣物そっくりです。膠と思へば間
ちがひのさい顔色で。」

「これは嚴しい。もったも身軀が弱いもんで、小さい
時ときも大おおきな聲こゑ出しちや啼なげませんでしたから。」

「いよいよ争あらそはれませんか。生まれながらにして商賣
を知るしンです。研屋の子はとぎやく、鍵屋の子はか
ぎやく、扇屋の子はあふぎやく、
ぎやく、
屋根屋の子はやねやく……」

「まさか。」

「いえ、御前おまへさんの御子おこは弱よわかッたと云ふので、啼なく
にもくすりく。」

(一一二)それからそれ

(原文は英人某の作、題して「The and Jesus」といふもの、おもしるゝ組み

立ての文ゆゑことさら
に譯して茲に之を採る)

主人「はッ、シヤアパス、達者たつしやだ。國許くにきの様やう子はどどうだ
僕僕シヤアパス「いけません、マグパイ(犬の名)が死しにました。」
「そりや可哀あはさうな事ことをした。まかし何なにうして死しんだ
のだ。」

「食くひ過とぎで。」

「意い地ぢきたあめ。どどうして然さう食くひ過とぎたのだ、何なにを
そそんかに食くツたのだ。」

「馬肉ばにくを澤山たくさん。」

「どどうしてそそんなに馬肉ばにくを。」

「親御さんの所の馬のこらすの肉で。」

「何だ、馬もミンホ死んだのか。」

「へい、あんなり働らかせたもんで。」

「どうしてそんなに働らかせたんだ。」

「水をはこばせましたので。」

「水をはこばせた？何だッて。」

「火事を熄さうとてです。」

「火事とはどうして。」

「親御さんの御家は全焼になりました。」

「親父の家が全やけにあつたとえッ。どうして。」

「松明の火が多分点いたのでしやう。」

「松明とは、何の松明。」

「ああなたの阿母さんの御葬式の。」

「いえッ、おふくろが死んだのか。」

「はい、御氣の毒なことをいたしました。まさかには。

うあらうとも思しめさかかつたでしよ。」

「さうとは何。」

「ああなたのおとっさんの御亡くあり。」

「やッ、親父もかッ。」

「はい、その咄しを御聞きにみると、直に床へどッと

御就きでして。」

「その咄しとは何。」

「夕い咄し、實に不好き沙汰で。」
「もつと夕い沙汰かのか。」

「はら、どうも。御家の關係の銀行が破産で、御家の資産は皆無となり、もはや貴下の御身體にも一錢の金さへ残りません。で、一切を御知らせしやうと存じまして、一生懸命に私もまわつたのでございます。」

(一一二)計算の名人(米の大統領リンカンの談話の一節)

あるところにポムペイといふ男が有つて算術に達して居ると自負して居た。なるほど相應には能るのでもあらう。まかし高が暗算速算ぐらゐるもので。

シモンソンといふ牧師がその噂を聞いて「一つ試みてや

らうと思ひ、やがてポムペイに會つて、

「君は大變に算術の名人ださうだね。」

「はい。どうか何でも御ためしくください。」

「ここに私がどう考へてもできぬのが有るのだ。數へて見てくれるかね。」

「やつて見ましやう。仰やつて下さい。」

「斯うなのだ、垣の上に鳩が三羽とまつて居たと御思ひ、ね、それから鐵砲でそれを撃つて美事に一羽を仕留めたと御思ひ、ね、さうするとその後には何羽残るか。」

「何羽残るといふ、それだけですか」とあまり詰まらぬ問ひなので呆れた顔つき。

「さうさ、それ勘定するんだ。」

「つまりあいちやありませんか。三羽居たのが一羽死ねば二羽残るに決まッて居まさ。」

「あッ駄目だ、名人なもんか。」

むツとして、「勘定がちがふんですか。」

「ちがふともさ。二羽どころか一羽も残るもんぢやあ
いだらうが。一羽死んでしまふ、ほかの二羽はびツクン
して飛んでしまふわやアイ。」

ポムペイは一句も無し。

(一一三)盗見の利

よほど以前の事であつたが米國インディアナ州のある市

に瓦斯を点火しやうとの説を唱へる者が有ッて、終にそ
れを市會に提議すると、思ひきや大多數で否決されやう
とは。否決の譯はどうかと聞くと、「盗見に便利を與へ過
ぎて困る。」

(一一四)逆施倒行

トリビエウンの記者ホレエス、グリイレイは能文の士で
はあつたが、非常に手蹟がわるく、一度や二度讀んでも
とても解らぬ字のみを書いた。ある時わが使ッて居る一
記者を解雇することにあり、解雇状を例の悪筆でしたた
めてわたし、その儘社から出て行かせ、忘れるともあし
月日を経て後、ある地方へ漫遊に行くと、そこで有力者

一新聞社にはなはだ好い地位で前のその解雇した男が記者とあつて居るのに遇つた。

「おツ君か、うまい地位にあつて結構だ。」

「有りがたうございませす、先生、これも先生の御庇陰、その内御禮を申さうと思つて居ました。」

「痛み入る。僕が此處へ世話をしたのでもあし……」

「いえ、御世話にあつたのです。いつか解雇状を下さいたしましたる。あれをその儘此社主に示し、先生からの推薦状だと云つたところ、字が讀めないので、先生の署名をのみ認めて疑はず、それから斯う優待してくれるのです、あははは。」

(一一五)狐がり

はじめは賤業婦であつたのが一躍して何某爵家の令夫人とあり、玄きりに萬事に注意して上品にかまへて居らせられる。ある時主人公御最負の獵人佐吉といふものが御譏嫌うかがひ旁信濃から上京して、令夫人にも御目どほりに及び、

「山家ではございませす、又かはつた眺めもございませす。どうか此秋には是非御あそびに御出でを願ひ上げます。何しろ狐狩りの本場で、それはそれは面白うございませす。」

「おお不好だ。あたし狩獵の事は聞くのも不好——あ

ンな残酷さはまることを。」
 頭あたまからこみしつけられて、むツとして、「残酷ざんこく、と仰おつしや
 います、御聞おききあそばせ、第一だいいちに紳士方しんしほうが皆御好おこのみに
 ありますよ、第二だいにに犬も皆みなよろこびましたよ、第三だいにに馬も
 また嬉うれしがりましたよ、みインも嬉うれしがり、好このみ、喜よろこぶも
 のばかりです」とやや嬉うれしく考へて、「残酷ざんこくだと言いって厭いや
 がるのは唯狐たゞきつねばかりです。」

(一一六)柿かきの實み

太閤たいこうがやつし形かたちで嵯峨野さあまのあたりへ鷹野たかのに出、咽喉のどが渴かわい
 たとして柿かきの實み二つを自身じしん民家たみかに就つて買かひ求め、値ねはいく
 らたと聞くと、白髭しろひげの生はえた、百姓ひやくしやうあがら氣けだかい老人らうじん

が胡坐あぐらをかいた儘まま、「はい一つ千貫せんくわんづつ」と對こたへた。
 さすがに驚おどろいて、「何なんだ二つで二千貫ふたせんくわんか。高たかいにも法はふが
 有ある。よし、此邊こゝらに然さう柿かきの實みは少すくないのか。」
 「柿かきは少すくなくさいですが、殿とのさまの直買ちかひひは滅多めつたに有あ
 りません。」

「ふむ、うまく言いひ居をるわい。それで高たかくいふのか。」
 「そればかりぢや有ありません。日本にっぽん六十餘州むそじゅうをあづか
 る命いのち、柿かきの直買ちかひひあとして、うツかりすれば障子しょうじの陰かげか
 ら槍やりでも出でる、それを思おもへば二千貫ふたせんくわんではやすいものです。」
 「此奴こやついよいよ不思議ふしぎだわい。誰だれかに智ち慧ゑでもつけら
 れたか。」

途端障子をさらりと開けて、「その謀主すあはち拙者と顔さし出すのを見れば曾呂利。つまりかるはずみあ微行を思ひとまらせるための一場の狂言。」

(一一七) 猿を買ふ

「兄さん、四錢かくれな、猿を買ふから。」

「猿かシを買はずとも可い、家にあるから。」

「うそ。居やしないぢやないか。」

「居る。それ、さういふ御前が猿だ。」

「うふッ、可いやそんなら六錢かくれ。」

「どうするンだ。」

「その猿に粟を買ってやるから。」

(一一八) 子音

文法の教師、「さア高橋さん、昨日教へたことについて問ひますよ。こたへられますか。」

「られます。」

「子音といふのは何です。」

「子音ですか。えいんはその、ええ、夜が更けたことです。」

(一一九) 助かった

「久しぶりだったね、權助さん。まかし御前の村の作兵衛どんは飛んだ氣の毒な事だったねエ。」

「はア、新聞で見たのかね。」
「見たともさ。どうして如此人が人ごろしを爲たのかね。わからぬね。」

「何しろ阿魔ッこれが悪いんだ。殺されても仕方ねエや、よく殺したんだ。」

「それでも謀殺罪で死刑にされたんだろ。」

「うん、首くくられるてへ事だッけが、しあはせに助かったよ。」

「どうかして赦されたのか。」

「うんにや。赦されは爲ねエが、首くくられる前日に腹ツくだりでおッ死んだんだよ。」

(二二〇) 來月

山出じの下女「御新造さま、來月はまだまゐりませぬのですか」と曰ッて、一座にのこらず笑ひ出されて、急に言ひなほす氣で、「いえ、先月はまだ無くなりませぬのですか。」

(二二二) 日時計

「鏡や、この懐中時計の時間はすこしをかしい。庭に出してある日時計は十二時何分にあッて居るか知ら、見て来てくれ。」

「かしてまりました」と口は勢ひが好い。
行ッて見たがどう見るのかわからない。きッと思ひつ

いて無残にも日の影の折角映じて居るのを外して持つて来て、「どうぞを御覽くださいまし。」

(一一三)安全策

今の英のベレスフナルド卿が門戸開放の利をとちへて日本へも過股来たのは人の知ったところで、又その歸途米國で馬車に顛覆され、さいはひにその戸が開いて居たので怪我也せず飛び下り、「門戸開放の利斯くの如し」と曰つて笑つたといふことは是また人の知つたことである。

同じやうなことは稍臭名の有る某代議士が大磯の海岸を散歩して居る時、誰とも知らず石を抛げた。さいはひに其代議士は下を向いて居たこととて頭に中らなかつた。

代議士すまして、「頭をさげて居たればこそ免れた。もし

眞直にかまへて居たなら、さうは行かぬい。」

(一二三)手療治

大酒で熱をおこし、渴をはきはだしく覺える病人の枕もとに醫者二人ばかり列坐して、熱と渴とそのどちらかを先治さなければならぬと相談して居るのを、大酒の先生臥床で聞いて、「どうか熱を御あはし下さい。渴くのは私かなほします。」

(一二四)知らぬ

線路巡視の驛夫にさる處までのマイル數を旅人が尋ねたがその驛夫は驛の事よりはか知らぬのである。

「もしもし、川崎まで何マイルあるかね。」

「三十マイルもありまじやうか。」

「三十マイル、そんなにありやしまい。」

「それぢや十マイル。」

「まだそんなにもあるまい。四マイルぐらゐなものだ
る。」

「さうかも知れません。」

「何のこつた、君は何も知らさいんだな。」

驛夫は肩をいからして、「もとより此方から知つてると
言ひは爲さいぞ。」

(一二五)永のくるしみ

死刑の宣告を受け九罪人「うかがひますか絞殺とは索を
つかふのでしやうね。」

辯護士さうだ。あらたまつて夫を聞いてどうする。」

「いや私もみづから悔いましたからもう重い刑はいと
ひません。」

「殊勝だ。さうかくては爲らぬ。」

「むしろ永く苦しむのを望むくらゐで、罪亡しに。」

「さすがは悪に強ければ善にも強いさ。」

「ですからいッそ斯うして永く苦しませて下さいませ
んか、罪はるばしに。」

「どうして」腰へつなぐのも頸へ懸けるのも索はおさ

し索あはですから、いッそどうか頸くびのを廢やして腰こしにして下ください。頸くびだと苦くるしみは一時とき、腰こしだと一生しやうせい涯はい、くるしみの永ながさが然さうちがひますもの。」

(二二六)まどつま

「活いきながら埋うめられるのと、殺ころされて焼やかれるのと何方ちが可いとだしぬけに權助ごんすけに問こひかけて急きまに答こたへをうかがすと、すツかり慌あわてて、「活いきながら埋うめられる方がほう」

(二二七)うしる姿

「いくら自分じぶんで最負目ひいきめで視みてもまツたく私あたしの顔かほは阿多福あたふくで取とるところもありませぬわ。けれどもね、後姿さしうそなたははさう

云いッては何なんですが、誰だれにも負まけませぬわ」とある婦人かじんの大氣だいき焔えん。

「まツたくさうですな。後さしうすがたは如何いかにも好いい」と口くちわるが反響はんきやうして、「ですから誰だれでもあなただの後さしうばかりを見みたがります。」

(二二八)索あはで粉こな

「御無ごむ心しんだがすこし君きみの索あはを貸かしてくれないか、決けつしてわるくは爲しないから。」

貸かすのが不い好やさに「あいにくだが僕ぼくはこれからこの索あはで粉こなを縛しばるんだ。」

ほとんを解げしかねて、「何なにを、え、粉こなをッ、粉こなが索あはで

縛れるか。

「縛れさいでも可いんだ。貸すのが不好で出傍題を言ッたら生憎途方もさい粉と言ひ出したんだ。」

(二二九)皮肉

肉屋が仲人で、皮剣ぎが犬ころしの女を貰ふといふ面白婚禮の席に出たある口わるが、「いよッ花婿どの、花婿どのの身の皮までも剣いちやいけないせ」と云ふと、する。「ふん、皮と肉とはどうする。」皮肉屋だから御前に賣ッてやる。」

(二三〇)青

「さア今日は肝心の見合ひの日だから一生懸命に御つくりして行くんだよ。何でも伯母さんの云ふとほりに御爲と六十ばかりの老女大さわぎ。」

「青の半衿が好いわ、眞珠が縫ひこんであるから。」

「いけないう、あれは。」

「可いわ、高いんだもの。」

「いくら高くツてもいけないう。一昧御前の顔は青いんだもの。あんな半衿だとそれこそ生草見たやうに見える。」

皺だらけの伯母の顔をぢツと見つめて、「だッて枯れ草より可いわ。」

(一三二) 儉約

「旦那さま、えらい事めしや考へ出しやした。」

「また權助のいつもの出来ない相談か。」

「うんにやきつと能るンで。」

「云ッて見あ、どういふンだ。」

「御前さんは客だろ、その客が人一倍うれしがらあくらやあんねエこッて。」

「ふざけるあ。」

「斯うだ。下男一人でこの家の仕事をするンだろ。」

その下男を二人にすりや半分の仕事をする譯だろ。よし
か三人にすりや御前さん一人で仕事をして済むことにはあ

る。どうだ。」

(一三三) ゆくあつ

「さつ返してくれるンです、困りますどうも足ばかり運ばせられては。」

「御氣の毒さまで。今度は間ちがひ有りませんからつぎの日曜の午後六時ころ来て下さい。」

「たしかですか。」

「たしかです。きつと午後六時ころ。」

「その時やどういふ様にしてくれます。」

「その以後は是是いふところへ催促して下さいと行く先を御知らせします。」

(一三三二)法螺の人

「國の自慢だと云ふけれども、まったく私の國は好い國で、何とぞうたる、馬をころがして見るとやがて好い土地とあり、それから麥を蒔くとすさまじくできるんだ。おそろくは世界に又と有るまい。」

「なるほど無いや。」

「そりや不思議とも何とも云へないよ。」

「おれも知ッてる。御前の國では法螺の貝も人間にあッて音を吹くね。」

(一三三三)ちからおとし

「三どん、御前の縁合ひの人が亡くなッたとかね。」

「はア亡くなりましたよ、こちひだ。」

「可哀さうに。遠い血屬か、それとも近々——」

「二十里ほど離れたところで。」

ふツと失笑して、おもしろくあッて、

「御前、さぞ力を落としたる。どの位おとした。」

「わかりませんね。」

「落とし物だ。警察へ届けりや可かッたに。」

「でも自分で身分の落としたところを見ませんもの。」

(一三四)片足

脚をあげて「斯ういふ風に永らくの間片足で立ッて居るやうでなければ踊りの名人ぢやない。えらいだろ。」

「えらい。だがその儘で寐られるか。」
 「寐られるもんか、まさか。」
 「ぢや鷺鳥より下手だ。」

(一三五)不權衡

大風呂敷をひろげて居る男に向かつて、「もしあなたの御商賣は何ですな」と聞くと、

得たりかしこしで、「ユロツプ製造職です。物は小さいものを扱ふのですが、随分と手廣なものです。何しろ一年の高が……」とそろそろ始めかかる。

「はてあ、私はまたユロツプ抜きを御しらへなさるかと思ひました。」

「あせです。」

「ユロツプなら栓になるが、抜けばもうのべつですから。」

(一三六)熱の退去

「おッ、君が扱って居た病人、どうだあの熱病はもう退去したか。」

「退去した、薬を盛るよりはやく。」

「さうか、そりや可い。よろこばれたあ君は。」

「ところが病人の生命も一所に退去してしまつた。」

(一三七)そこへ泊れ

「醫者とは知つても頓智の有るとは知らず、夜中にその門

をばげしく叩いて、「もしもし起きてくれ。」
 あまり叩き方がはげしいので、もしや病家からとも思
 っで、醫者は起きて窓を開けて、「どなた。」
 「君の親友だ。手みじかく聞くが、醫は仁術ださうで、
 人をば憐むね。」

「うん。」

「ぢや今夜ここへ泊めてくれ。何と人をあはれむ、不
 好とは言へませう。」

「よし、言ふとほりにする。」

「開けてくれ、そんなら。あッ寒う。」

「さうや、ここへ泊めてくれと云ふから、言ふなりに

なッて其所へ泊めてやる。」

「この門外へかッ？」

「もちろんさ」と、やがで窓はぴたりと閉まッて、

「あ、寒い晩だ。」

(一三八)

わるがしてい主人が下男に向かッて、「どうだ、梨子を
 おれが十個ばかり買ひに行ッたところだ、丁度臺の上に
 は十三はどしかなかッたとする、さうすると十個買ひ取
 ヲたあとにいくつ残る。御前は勘定がうとくて困る。ま
 づ稽古に考へて見る。」

下男はしばらく打ち案じて、「他に客も有りましたか、

それともまた夜でもありましたか、それを買はうとした時が。」

「そんな事はどうだつて管やしないぢやないか。」

「いえ、旦那さまといふ、買ひ手が買ひ手だからそれから聞いてかからなければ。」

「さうすると、客が他にも有つたとか、又は夜だつたとかすれば何うする。」

「もしさうから梨子は一つも臺に残りませんや、代は十個だけ拂つたにしろ。」

(一三九)他人

ミスシツと線せんの汽船きせんの中で日本にほんの一紳士しんしが理髪りはつをさせ、

ついでに面白おもしろ半分はんぶん分鬚ぶんひげから眉まゆから髪かみの毛けから一切いっさいを紅あかく染そめてもらひ、一つ女房にようばうをおどろかせてやらうとした。見みちがへるほど顔かほが變かはつて見みえるので勇いさみ進すすんでやがて女房にようばうの留守うそして居おた船室せんしつへ立たちもどると、はたして見みえなくなつて、

「あのだあなたさまですか。」

「ふッ、おれただよ。おウれまだ氣きがつかあいと見みえる。

亭主ていしゆのおれたよ。」

「うそ。あたしの夫あつとは日本にほん人じんです。」

「それでも乃公おのこうだと云いへば。」

「この人ひとは不い好やな、嘘うそつきあ人ひとだね。紅鬚あかひげあんなあなた

しや良人にもちませんよ。」
どうしても承知せず、戸の外へ無理にも押へ出さうと
して、ふとわが夫の靴、何か特殊の目じるしの有るのに
気がついて、

「おや、足だけは良人だ。ちや足だけ中へ御はいんあ
さう。」

(二四〇)長坐

寄つてたかっているの法螺ばあしをした中で、ことに
喝采を博したのは一人の男が長坐の客についてした咄
しで、曰く「おそろしく長坐の好きな客が有つて誰でも
持てあまして居たが、やがてその内その男が死ぬと、お

どろいたことには影法師までが死後二週間ほどやツぱり
壁に長坐して居た。」

(二四一)時代つき

年よりの癖に懺のはへた洒落あどを云ふのは聞きぐるし
いものと知らぬ老人が若い女に例の洒落をいくらも振り
まいて、「どうだ、おもしろからう。洒落も斯う行かない
ではあ」と鼻うごめかす。

「洒落も旦那さまのとはりでございますよ。」

「然うだろ。わかるか感心。」

「時代で値が有るとしておくので。」

(二四二)自他の観

瘋癲院の患者に向かつて、「君はどうして茲へ入れられるやうにあつたのだ。」

「喧嘩して、議論して。」

「どういふ事がらで。」

「己が喧嘩したらみんなが己を狂者だと云ふ。だけれども己はみんなを狂者だと云ふ。多勢に無勢、己の方が入れられた。」

呶狂者の言ではあるが一理も有る。

(一四三)皆無

ダイユン、シヤアアの皆無の咄しを左に、

「蛙の澤山にゐる池のはとりに大きな蛇があらはれ、

いさあり大きな蛙の脚をくはへて嚙みかけた。蛙も一生懸命だは嚙まれあい。すぐに蛇の尾をくはへて、その方から嚙み出した。

蛙が一寸嚙まれると蛇も一寸、蛙が二寸だと蛇も二寸嚙まれる、双方次第に嚙んでく、とうとう二疋とも消えてあくなつた。」

(一四四)狭い國

支那人久しく日本に居てやがて國へ歸つて、「日本はまことに美しく、住まひよく、まことに快く活計を立てて居られるよ。只こまるのは知つてのとほり國が小さくて四方みか海だる。夜あどうつかり歩くと、おきに海の中へ

落ちるかと思はれるので、險難であらう。」

(一四五)象の皮

禿頭の教師、「皆さんの中で象の皮を見たことの有る人がありますか。」

生徒甲「先生、あたし見ましたよ。」

「さう。どこで。」

「動物園で象の身体の上で。」

「おはッ、そりや當り前だ。」

生徒乙「先生、あたし見ましたよ他で。」

「さう。どこで。」

「先生のその頭へかぶってる——」

「私は象の皮の帽子をかぶりやしませんよ。」

「いえ、その頭の禿の皮。そりや象のでしょ。」

「ひどいことを云ふ。これが象なもんですか。」

「それでも厚いから下から毛が生へること出来あいでしょ。」

(一四六)妹を可愛がる

「一郎や、御前は妹を可愛がるかえ。」

「ああ、可愛がるとも。」

「どういふやうにして可愛がるか、して御見せ。」

「すこし考へて、「して見せるからおとッさん銀行の小切手御出しな。」

「小切手をどうするの。」
 「おとっさんが毎月おツかさんに與るやうに私も妹にやらうと思ふ。」

(一四七)はたしあひ

武士が二人で決闘をしやうとして居るところへ見すばらしい姿の男が近づいて来て小腰をかかめ、

「旦那さま、御ねがひでござります。御覽のとはりの貧乏で……」

「いや施行どころぢやない。邪魔せず退いた。」

「乞丐ぢやござりません。女房は永のわづらひ、子供は八人、末のが二歳……」

「うツとしい、退けと云ふのに。今これから果し合ひするんだ。」

「それですから御ねがひで。私の職は桶屋でございませが、不景氣で仕事が有りませんで。」

「そんな事を聞いてられるかッ。桶屋あんなに用は無。退かぬと一所に研りころすぞ。」

「どうぞ御ねがひでございます。あちら方の早桶は私にこさへさせて下さいまし。」

わツと云ふ哄笑、氣が抜けて決闘もその儘御流れ。

(一四八)大袈裟

何でも大袈裟に言ひたがる質の男二人が落ち合ッて、

甲「昨夜とまツた宿の酒の強いことと云ツたら一とほりや二とほりでなかつた。何しろ普通の酒だといふのに玉ラム子の瓶へ入れて來た程だ。」

乙「負けぬ氣にあつて」「それと反對かのは僕が昨夜とまツた宿の酒さ。いやその氣の弱い弱くさいのツて論に絶えてる。あんなまり氣が弱いので酒の奴め徳利の口から注がうとしても出得かいんだ。」

甲「また負けぬ氣にあつて擔がうと思ひ」「いくら強いと云ツたツて玉ラム子の瓶へつめたのも始めてさ。もちろん瓶の玉は始終落ちて居た。」

乙「また負けぬ氣にあつて」「いくら弱いと云ツたツて、

口から出得かいと云ふのも始めてさ。もちろん徳利の中は空虚だツた。」

(一四九) 生殺

「先生、何しろ家内を治すなり又殺すなり何れにしても其上で此五十圓だけは上げます。」

そのつもりで醫者も施療したが、女はその甲斐あくて死んだ。醫者も蟲が好くて、直にその五十圓を請求する

「御待ちあさい、家内を御なほし下さツたか。」

「いや、それは御らんのとほり。」

「御ころしくださツたか、それあらば。」

「以てのほかな、殺しはしません。」
 「では此五十圓は上げられませんよ。なせと曰ってど
 らんあさい。殺すあり治すありしたら上げると言ひまし
 たる。ああなたは殺しもせず、さりとて治しも爲ませんで
 しょ。五十圓どうして取れます。」

(二五〇)必要

一眼でその癖普通の眼鏡をかけて居る辯護士が法廷で辯
 論して居る口上の中に「わたくしは不必要な物は一切用
 りません」との語句が有った。

判事はむれに「それぢや其眼鏡は」と一本参る。
 さすがに辯護士、「人に一眼と見られあいやうにとの蔽

蓋です。」

お 笑 草 終

明治三十二年十二月廿六日印刷
全三十三年一月一日發行

拾笑小草

著作權
所有

定價卅錢

著者 哄 笑 子

發行所 青木恒三郎
東京市日本橋區通一丁目十七番地

印刷所 嵩山堂印刷部
大阪市西區土佐堀三丁目三十八番屋敷
大阪市東區心齋橋筋博勢町角

發行所 青木嵩山堂
東京市日本橋區通一丁目角
(電話東二五〇番)

全賣捌所 嵩山堂支店
伊勢四日市市堅町
(電話本局七八九番)

